

えられる。そして、最も重要なことは、幕末以降肥前、瀬戸を始め一大生産地から多量に入って来る陶磁器類の存在であり、経済基盤の弱い地方窯に取っては決定的な要因になったものと考えられる。

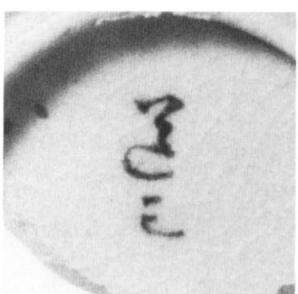
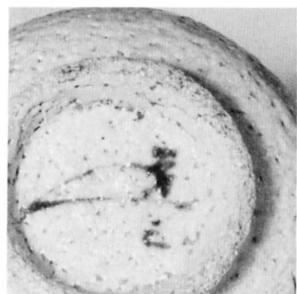
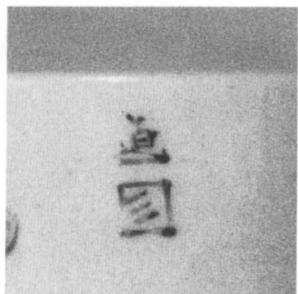
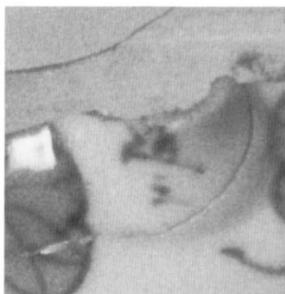
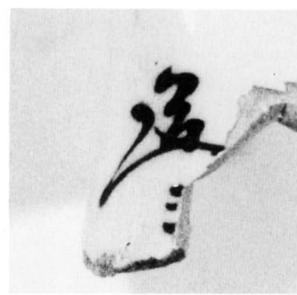
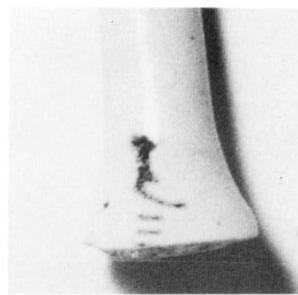
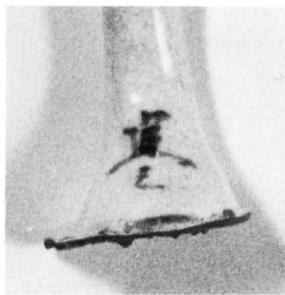
### (3) 陶工「道三」について

「道三」は、寺内焼隆盛期の名工で長庚亭、寿楽軒、尾形、秋田等の号を名乗ったと言われ、発掘調査においてもこれらの銘がある茶碗、皿、盃等が出土した他、盃の内面に官女と詩句を呉須書きし、それに「仁儀堂 道□」とあることから仁儀堂道三と名乗ったとも思われる。また、伝世品として蓋裏に「秋田道三自画瀬戸薬入製之嘉永元年十月」銘の染め付け壺（註12）、「道三製自画」銘の上絵五彩水注（註13）の県指定2点と、染め付け土風呂の市指定（註14）1点の他、未指定でありますながら名品と言われる道三銘の作品がいくつか現存している。

これほどの名品を残している道三であるが、その経歴については謎に包まれ、わずかに文献史料をたよりにその一端が紹介されているに過ぎない。

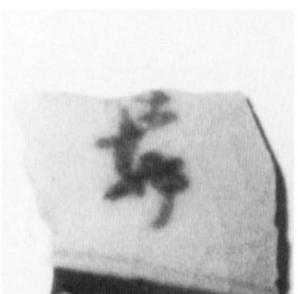
ここで、郷土史家升屋旭水が大正5年前後に著わした道三に関する好史料が3点（註15）あるのであげておく。なお升屋旭水は慶応元年に生まれ、大正10年に没している（註16）。一つは『羽陰諸家人名録』で「寿楽軒道三（竹内）角館の人名は謙治寺内村ニ窯を開きて楽焼を製し栗田口道八の門人なり号を寿楽軒と称せり。陶画に巧なり嘉永頃」とある。『羽陰諸家人名録』については下書きと思われる原稿も最近発見されている。同じく旭水の著書『旭水叢書』巻一、二合冊には「楽焼道三 道三ハ栗田口道入の同門なり道三画の巧なり陶術ニ劣れり道入ハ陶術の巧なるも画の劣れり多くハ道入の焼きたるものへ道三画をかきたると云ふ道三は角館の人竹内謙治と云ふ寺内の窯を開きしハ文久慶応の頃なるべし」。さらに『備忘録』には「栗田口道入ノ兄弟子ナリ道三ハ画ヲ能クシ陶術ニ巧ナラズ道入ハ陶術ニ巧ナリ道三ハ角館ノ人竹内謙治ト云フ寺内ニ窯ヲ開ク明治初年ノ人」とある。これからすれば、道三は角館生まれで本名を竹内謙治と言い、京焼の高橋（栗田口）道八=仁阿弥道八の門弟で、製陶技術よりも絵が得意だったということになる。

これらの3点の史料は、ほぼ内容が似通っており、同一史料をもとに何回か書き直されたものと考えられる。特に、後者の2点は最後の年号が若干異なるだけでその中身はほとんど同じといってよい。道入については、他の史料がある。実見した市内在住の福島彬人氏によれば秋田焼の項で旭水日記の大正9年4月24日の中に、「師匠道入ハ栗田口ノ人啓治ト称ス明治二十三年七十二歳ニテ秋田ニ来テ奥田氏ニ教エタリ（自楽亭ノ号アリ）」とあるという。道入から教えを受けた「奥田氏」は奥田永蔵（号は道遊）で秋田焼の創始者である。文中の「明治二十三年七十二歳ニテ秋田」については日記という性格、また旭水自身が積極的に活動した25才頃の出来事であり、かなり信憑性の高いものと考えて良いであろう。上記した奥田永蔵が、秋田焼と称したのは明治26年のことであり、この点では道入との関係は一致する。しかし、『旭水叢書』並びに『備忘録』にある「道入の製陶



寿  
樂  
軒

□  
樂  
軒



道  
三  
錦  
燒  
用

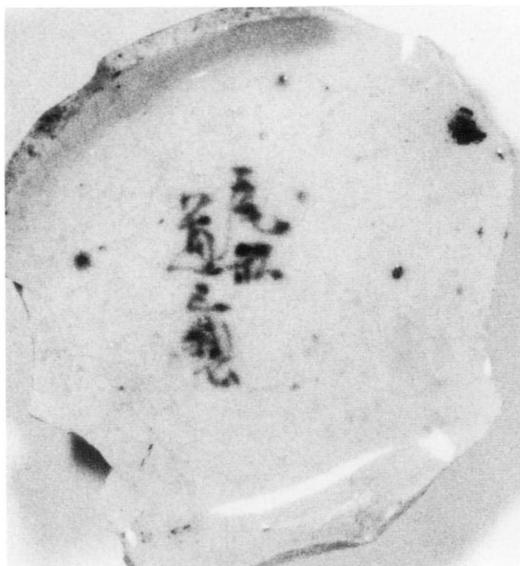


寿  
樂  
軒

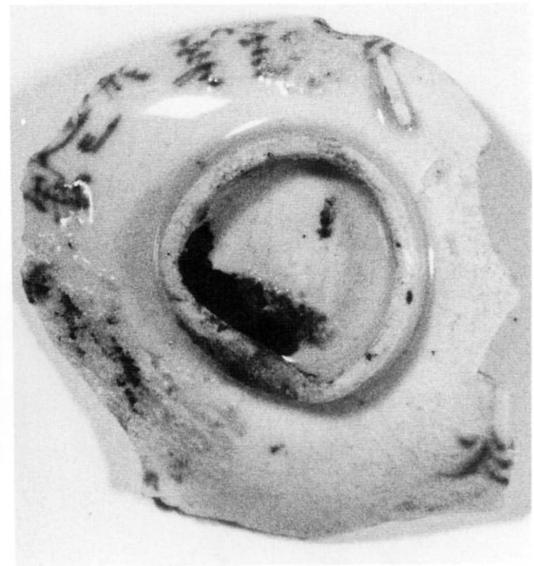
秋  
田  
□  
三  
製



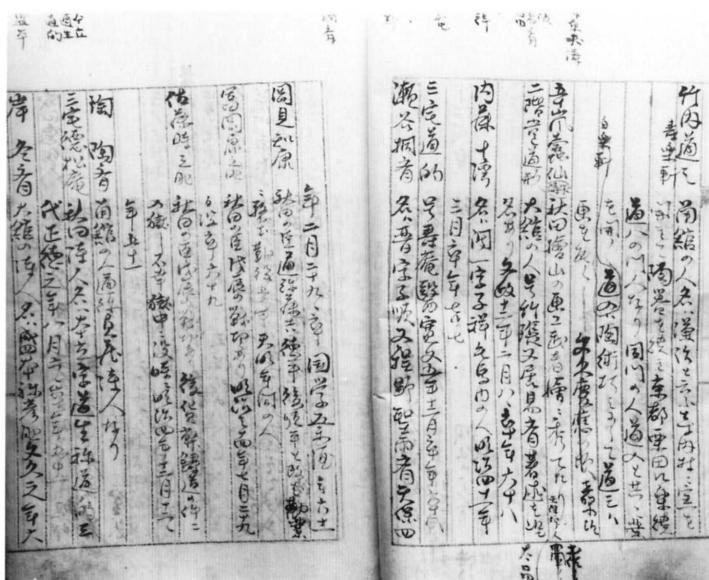
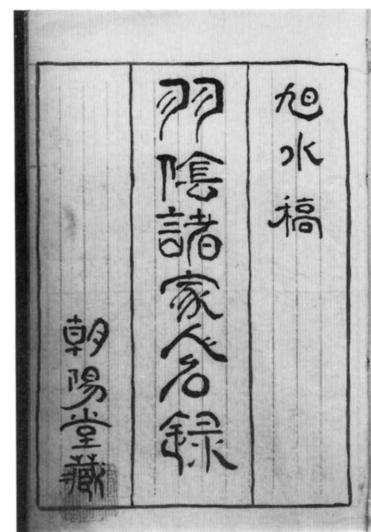
寺内燒窯跡出土「道三」銘



「尾形道三製」銘



「□保十三□暮冬□形道三製」



上・升屋旭水著『羽陰諸家人名録』 下・同『同原稿』(秋田市升屋ハツエさん蔵)

したものに道三が絵付けをした」という記述については、道入と道三との共存関係については年代的に誤差が生じることになる。むしろ『羽陰諸家人名録』の「陶画に巧なり」（傍点筆者）、すなわち製陶も絵付けも巧みであったと理解するのが自然であろう。発掘調査による道三銘の陶磁器は、数10点程出土しているがいずれも胎土が良質で器肉は薄く、細筆を駆使した繊細な絵付けの物が多く、他の染め付け磁器類とは一味異なる作風である。仮りに二人の合作であったとするならば、ある程度の作品にたいしては、第45図の395のように「細工□□」、「絵師永八」等の銘文が記されるのではないだろうか。

道三が京で修業をしたという記録は、他には見当らない。市内在住の郷土史家、佐々木善三郎氏の話を紹介しておく。佐々木氏は長年の間道三の調査をされ、その経歴についても佐竹北家の土竹内外衛が道三ではないかと考えておられる。そこで前出の『羽陰諸家人名録』にある「高橋道八の門人」に疑問を抱き、現高橋道八窯元に過去の門下生の存否について問い合わせたことがある、とのことであった。筆者も高橋道八氏からの手紙を拝見させて頂いたがそれによると、現存する家伝の資料には「竹内謙治」なる門下生の名前は無いとのことであった。ちなみに京焼二代目道八の長男は幼名が道三で、三代目道八を継いだのは天保13年(1842)のことである。京で実際に修業を重ねたかどうかは別にして、当代名声の高い師の門下生あるいは縁故を名乗ることがあってもそれほど不思議ではないと考えられる。

道三=謙治とすると、寺内窯に関連する2点の文書がある。一つは、白岩の下田文書で「乍恐書附を以、奉歎願候」で始まる下田忠衛門の嘆願書である。文久3年に下田忠衛門の太白方が下田から謙治に、明治2年にはさらに謙治から土焼方の桜田氏に移管されたが、この間の藩の処置にたいしての不満が記されている。もう一つは、藩の家老を務めた川井家の「安政子七月」で始まる文書で、謙治が自立山を築いたことが記されている。文頭の年号と干支にズレが認められるものの、謙治が寺内窯を維持するために仙北、松岡から土石等原料を入手していること、年間の窯入れ回数等が記載されている興味深い文書である。。しかし、この文書が記された年代については不明であるし、文頭部分の年号と干支にズレについても干支をとれば、嘉永5年か、元治元年ということになろうし、年号をとれば、安政年間の出来事ということになろう。安政年間と言えば、2年に下田忠衛門が寺内で太白焼を始めた年にあたる。

ここでは、資料及びその信憑性については言及できないが、少なくとも道三と考えられる人物=謙治が寺内窯に関係していたことが明らかである。

道三の最も新しい作品として、「明治十四巳三月寿楽道三七十一才」銘の楽焼（註17）がある。この時点では、別項(2)で述べたように寺内焼は瓦窯を残すだけで、すでに陶磁器類の生産はなされていないものと考えられる。一説によれば、寺内から約500m南に位置する八橋で楽焼を行っていたと考えられている。幕末頃の八橋界隈は、八橋焼と称する低火度主体の土風炉等の焼成窯があり、一方では寺、神社、茶店等の集まった風流な地であったことがその要因としてあげられてい

る。また「尾形道三」銘の楽焼茶碗は絵付け、体部の詩句の内容が道三晩年の枯れた味が出ているとして八橋の頃の作品と見られている。しかし今回の発掘調査では、第50図375のように体部に「天保13年 尾形道三製」、見込に「尾形道三製」と呉須書きされた磁器製茶碗も磁器物原から出土しており、すでに以前から「尾形」を号していたことが判明している。時期、作者は不定ながら、調査地区内採集遺物のうち、第41図268、第46図337のように、明らかに楽焼風のものが出土しており、同地区でも楽焼を製作していた可能性も指摘できよう。

#### (4) 物原出土の磁器について

本調査では、陶器焼成用と考えられる登り窯一基のみで、明確な磁器窯は検出されていない。しかし、陶器窯の北側約40m程の位置で多量の磁器が検出され、その状況から磁器窯に伴う物原と考えられた。

寺内焼については、これまでいくつかの伝世品が紹介されているのみで、その器種、染め付け等の絵柄、そしてそれらの変遷については発掘調査もなされていないことからほとんど手がつけられていなかつた。そこでここでは、本調査で検出された磁器物原によってその一端でも明らかにしてみたい。

磁器物原及び周辺からは、多量の磁器と少量の陶器、瓦が出土している。特に磁器類は物原の性質上、磁器あるいは窯道具との熔着したものが多数認められる。そこで、物原とその周辺出土の熔着遺物の比較検討によつて、一窯当たりの磁器の組成と焼成量について考えてみたい。周辺出土遺物としたもの多くは、重機によって削平された廃土から採集されたものであるが、熔着遺物を対象としたものであり、この作業には差し支えないものと考える。

第95、96図は、それぞれ熔着関係にある磁器を表示したものである。上段番号は本図の番号、中断の（ ）内は、本文図面番号、下段は、本図内の熔着関係を示している。また下段番号のないものは、蓋あるいは身等に伴う、同文の器種をあげたもので、同時焼成と考えられるものである。

第95図は、Aブロックとしたもので18～20を除きそれが熔着関係にあることから、同時かぎわめて短期間に窯詰めされたものと考えられる。中でも2は、他の器種との熔着がもっとも多い。1～4は、見込に三足の焼台F I類（第94図805～810）を、その上に6、7、9、10の茶碗を乗せたもので7、13の如くである。皿は、焼台D類（第94図793～796）に乗り、4の如くである。採集された皿類の大部分は1～3で、これらのほとんどは焼台の足が皿見込に、茶碗の高台が焼台に熔着したものと考えられる。中には高台に離れ土を塗っているものも認められるが、あまり効果がなかったものと考えられる。また2と7のヘタレ、熔着は、両者の器表面に無数の細かいガス抜けによると思われる気泡穴と軽石状の重量しかないことから、焼成時の過剰温度か磁石土の不適格によるものと考えられる。この状況は7と17にも認められる。18は他の器種と直接熔着関係にはないが、13の「御役屋」銘の茶碗が多く出土することから、同銘丸皿も同時焼成の可能性を指摘できる。14は7、